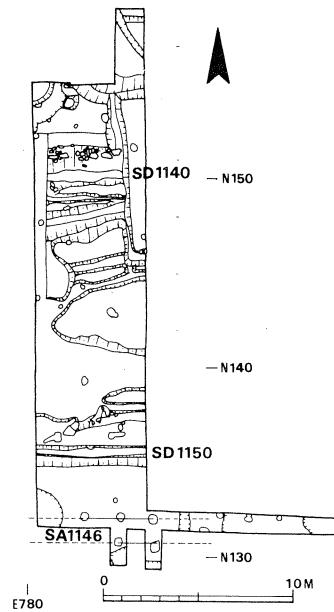


の素掘りの溝である。南岸は遺存状況良好であるが、北岸は削平を受けている。溝の堆積土は2層にわかれ、下層を奈良時代、上層を平安時代初期に比定できる。築地SA1146の北雨落溝と考えられる。

溝(SD1140) 溝SD1150の北15m(心々距離)の位置を東西にはしる幅1.9m、深さ1.2mの溝で、大きい自然石を側面に並べて護岸としている。護岸は北壁では良く残っていたが、南岸では発掘区西端に一部残っているにすぎない。底は素掘りのままで化粧はない。瓦類、土器類、貨幣、木簡などが出土し、奈良時代に比定できる。



第8図 第95-2次発掘遺構図

この築地SA1146、東西溝SD1150はともに、現在までに確認されている平城京条坊区割のどれとも明確な関連性を示さないが、築地と東西溝のいずれかが海竜王寺旧寺域北限の一端を示すものであることは確実であろう。ただ、両者のいずれが寺域北限であるかについては決しがたく、今後の調査をまちたい。

Ⅶ 西大寺の発掘調査(第95-9次)

庫裡増築の現状変更にともない西大寺の依頼によって行なった調査である。

調査地は、現境内北門西脇で伽藍中軸線上にあり、中大門跡推定地である。発掘面積は、33㎡と小規模であったため、中大門は発見できなかったが、4条の東西溝を検出した。うち平行に走る2条の溝(北幅0.5m、南幅1.2m)は東西方向の道路の側溝である。北側溝の一部は木樋を用い、その先端はコの字形に石組した暗渠となっている。道路幅は溝心々で5.8mあり、西大寺創建以前の平城

京条坊の坪を画する幅 2 丈の小路と考えられる。なお創建後も金堂院と塔院を区画する寺内道路として利用したとみられる。

この道路は、平城宮西面北門に通じる一条南大路と一条北大路の条間路にあたり、従来大路規模（8 丈）に推定していた。しかし今回の調査で幅員が 2 丈であることを確認し、さらに、検出した道路心と推定西面北門心がほぼ一致することから、この条間路は小路であったと考えられる。